

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和3年12月） 回覧

4. 葛飾八幡宮（その2 武家の信仰、頼朝公の駒とめ石）

御由緒に平将門の奉幣（神に布などを奉獻して祈願すること）を伝えています、平将門は天慶2年（939）に関東諸国を襲い、新皇を名乗っていますから、下総国府（国府台）に近い下総国惣鎮守の葛飾八幡宮に祈願したことは当然考えられます。

平家打倒の為に源頼朝は決起しましたが、治承4年（1180）に石橋山合戦で敗れ、安房に逃れ、そこから千葉常胤を中心とする下総武士団の援軍を得て再度、進軍しますが、『源平闘争録』（平家物語の異本だが千葉氏の事績に詳しいから、この関係者によって鎌倉末期から南北朝期に成立と推測）に「同じき五日（9月5日）、右兵衛佐（頼朝）七千余騎の兵を帯して、結城の浜（千葉市寒川町付近）より八幡の社頭に馳せ入り、下馬有って、願書を奉りにけり。八幡の原を打ち過ぐれば」とあり、以降は真間の継橋を渡って下総府中（国府台の国府）に入ったとの記事があります。

この八幡の社頭は進軍路と前後の地名（八幡の原もこの辺りの砂州上の地）から葛飾八幡宮と考えられます。頼朝は幕府創設後、千葉常胤に命じて社殿を修復しています。なお神社には頼朝公の「駒どめ石」とされるものが残っています。当時は鳥居の外にあり、そこで下馬しての参拝が印象に残っているから物語に残り、駒どめ石の伝承になっているのでしょう。



源氏は頼朝の先祖源頼信（房総を荒らした平忠常の乱を鎮め、東国武士の信を得る）、源頼義（武勇に優れ、蝦夷討伐の前九年の役に勝利して東国武士が信服）が石清水八幡を氏神として篤く信仰し、嫡男の源義家（後三年の役に活躍）は石清水八幡宮で元服して八幡太郎義家と名乗っています。頼朝が上総で飯香岡八幡宮に太刀を奉納し、下総の葛飾八幡宮で下馬・参拝したのも当然でしょう。

文明11年（1479）、太田道灌が関東の安泰を祈って参拝し社殿の修理を行うとの伝承もあります。応仁の乱に先行する関東の享徳の乱（1455～1483）で太田道灌が長尾景春方に与した千葉輔胤・孝胤父子に対して国府台城に1年近く布陣して戦っていますから、この時のことでしょう。（享徳の乱は、関東支配の頂点に位置する鎌倉公方足利家と、それを支えた関東管領上杉家に対立したことに端を發しています。争いを調停する立場の家がこの状態で、足利家、上杉家の内部も分裂し、扇谷・山内の両上杉家執事の太田家、長尾家や関東の諸豪族も家督相続等で内部対立して約30年の戦乱。名字が同じ者が争い、加えて裏切りもあり、わかりにくい戦いです）

その後、2度の国府台合戦を経て、この地は小田原の北条氏の支配下になりますが、豊臣秀吉が北条氏を滅ぼし、徳川家康が東海地方から転封されて関八州の主になります。当宮は家康から天正19年（1591）に52石の朱印地（公領扱いの祖税免除地、ちなみに船橋大神宮も50石）を賜っています。（朱印状は元禄11年に火災に遭いますが、元禄14年に再交付されたものが現存）。